



ザ・ターニングポイント

会社発展の契機となった転換点を紐解く

長きにわたる企業の歴史のなかにはいくつもの転換点があります。異分野への事業展開、新しい取引先の獲得、技術開発によるブレイクスルー、あるいは苦境から脱した契機など、現在の発展につながった各社の「ターニングポイント」を紹介しします。(この連載では創業から半世紀以上の会員企業にフォーカスします)

第12回 株式会社をくだ屋技研

自動車用エアポンプの製造で創業

株式会社をくだ屋技研は、大阪府堺市に本拠を置く、パレットトラック、リフター、台車などの運搬機器を手掛けるメーカー。1934(昭和9)年に奥田源之助氏が奥田鉄工所を創業したのが始まりです。

当時の日本は、満州事変や日中戦争などが起き、その後の第二次世界大戦につながる戦時色の濃い時代で、全体的に不景気な状況でしたが、鉄鋼業、自動車、航空機、機械工業などの分野は軍需の拡大により急成長を遂げていました。

源之助氏は自動車に目をつけ、自動車部品や自動車のタイヤに空気を送る高圧エアポンプなどの製造を始めました。

その後、戦争がさらに激化すると、軍事用品の需要は日に日に増加していき、太平洋戦争が開戦した1941年に奥田鉄工所は軍需工場に指定され、ポンプ技術の品質を高く評価されて高圧エアポンプが陸海軍省の指定品となりました。



創業時の主力製品 高圧エアポンプ

終戦の1945年、源之助氏から奥田源三郎氏が引き継ぎ経営者となると、現在も続く「独創技術がノウハウを生み出す」を意味する「O.P.K」(Original technology will Produce the Know-how)という自社ブランドを立ち上げました。

そして、それまでに培ってきたポンプ技術を用いて高圧ポンプの開発や、機械に潤滑の役割をするグリースを注入する「グリスポンプ」を開発すると、早々に特許を取得するなど業界での勢力を拡げていきました。

株式会社をくだ屋技研の創立

1954年、日本が高度経済成長期を迎え、世界に類を見ない速度で経済発展を遂げていた頃、源三郎氏は奥田鉄工所から社名を改め、株式会社をくだ屋技研として法人設立をしました。

当時従業員数は約50名で、敷地面積が1,800㎡の第一工場と3,000㎡の第二工場を持ち、販売先は北海道から東京、名古屋、大阪、九州と全国各地に広げつつありました。

源三郎氏は経営理念を、“技は教養に通じ研究は会社発展の基礎である”と掲げ、技術と教養(人格)を高めることにより、製品の上に会社の精神が表現され社会に奉仕できる。つまり、研究(創造力の開発)によって人材の育成をはかり、絶えず人的能力の向上に努め、個人と会社の和と繁栄を達成することを目標としました。この思想は、現在の経営理念「和は人格を形成し、研究は会社発展の基礎である」に受け継がれています。

法人化した当初は、自動車のタイヤ交換やメンテナンス時に車体を持ち上げるために使用するガレージジャッキやノーコンリフトを主力商品として製造・販売を行っていました。いずれも、得意とするポンプ技術を応用し、小型でもパワーのあるものやハンドル部分が外せて車載もできるといった、ひと工夫加えた製品が高評価を得ていました。



上)ガレージジャッキ
下)ノーコンリフト いずれも昭和42年頃の写真

もともと物資の運搬というのは、人の手で荷物を一つずつ運び出すというものでしたが、戦後にアメリカから重い荷物を複数載せることができる木製平パレットが入ってくると、運搬の効率化が見込めるとして多くの倉庫でパレットが急速に広まり、使用されるようになりました。そして、重い荷物を載せたパレットを運ぶための機械であるフォークリフトやパレットトラックの需要も高まりました。

▶ 発売時のパンフレット
(呼び名はパレットリフト、パレットジャッキ、ハンドリフトなど現在でもさまざまなものがある)



▼ 現在の商品
女性や高齢者も使いやすい電動アシスト付の最新モデル



Turning Point

日本初、パレットトラックの開発

顧客の声を聞き、ニーズに合わせたな製品を次々と世に送り出していた同社に、「パレットトラック」を作れないかという依頼がきました。

パレットトラックとは、工場や倉庫などでパレットに積まれた荷物を手で移動するために用いるものです。垂直の支柱と二股に分かれた爪が付いた機械で、パレットに積載した荷物を先端についた2本の爪を用いてパレットに差し込み、ハンドルを操作して、この原理でパレットを持ち上げる仕組みとなっており、フォークリフトと比べて機械の操作が簡易で小型なため狭い場所でも重い荷物を持ち運びすることができます。当時はまだ日本製のものがなく海外製のものが使われていました。

パレットトラック製造への挑戦は、運搬機器業界という未知の市場に進出する、をくだ屋技研にとっては非常に大きな決断でした。

源三郎氏は、「重いものを動かすという人が嫌がる仕事こそがこれからの日本に必要になっていく」という信念のもとに、新たな事業分野に打って出ることにしたのです。それまで培ってきたポンプや油圧機構に関する技術をベースに研究を進め、1964年、国内メーカーとして初めてパレットトラックを開発し発売にこぎ着けました。

日本製パレットトラックは、重量物を運ぶ工場や倉庫から圧倒的な支持を受け、同社の主力商品に成長。国内有数の運搬機器メーカーという現在の姿を形づくる、まさにターニングポイントとなりました。

全国に営業拠点網を広げる

その後、パレットトラックの好調な販売を背景に、東京営業所（現東京支店）を手始めに、各地に営業拠点を開設し、需要に応えました。



ちょうどその頃、日本は高度経済成長の真ただ中で、1970年の「大阪万博」開催に向けてその勢いが加速していました。時を同じくして全国で道路網の整備が進み、東名高速道路が全通（1969年）し、先に完成していた名神高速道路とつながると、物資の輸送がさらに広域化・活発化し、物流の中継拠点や倉庫が全国各地に建設されていきました。それにつれて、をくだ屋技研のパレットトラックは需要が急伸し、営業拠点の拡充とあわせ、補修部品の供給や修理対応などのカスタマーサービスに力を入れたことで、さらに受注が増えるといった好循環が続きました。

ユーザーが求める運搬作業のさらなる能率向上と合理化に向け、商品の開発と改良にも注力しました。例えば、1978年に開発されたパレットトラックのノーパッキンポンプは、従来のポンプに用いていたパッキンをなくすことで、パッキンの消耗による油漏れを防ぐことが可能になりました。他にも、バルブクリーニング装置が付いた油圧ポンプの開発は、これまでバルブを分解して洗浄していた作業を、フットペダルを一段と強く踏み込み、ハンドルを2～3回作動するだけで自動的に洗浄することができるようになりました。

これらの開発、改良の努力と功績が認められ、1981年に発明協会大阪発明大賞特別賞を受賞すると、1983年に日本発明振興協会第8回発明大賞、さらに黄綬褒章と次々と表彰の栄に浴することができました。

Turning Point

海外市場への展開 マレーシアと中国で生産を開始

パレットトラックで国内トップのシェアを占めるメーカーとして成長していくと、続いて海外市場の進出に向けて動き出しました。

輸送手段や情報通信技術の発達により経済のグローバル化が進んできたことを踏まえ、をくだ屋技研ではいち早く海外事業部を開設（1995年）しました。英語版の製品カタログを作成し、展示会にも積極的に出展するほか、地域に合わせた製品を現地で生産することを検討し始めました。

アジア市場でのシェア拡大を念頭に、1996年にマレーシアに工場を建設、2006年には中国江蘇省常州市にも工場を開設し、日本で磨いてきた高品質技術“Japan Quality”を前面に打ち出し、「便利な積載、軽快なハンドリング、安定した吊り上げ」をアピールして現地での需要を積極的に開拓していきました。近年では東南アジア諸国においても市場ニーズが多様化しており、日系企業はもちろん現地企業でも規格品を導入するにとどまらずカスタマイズを希望する顧客が増えてきています。



マレーシア OPK インターコーポレーション

進化するパレットトラック

製品の改良やカスタマイズは、をくだ屋技研の得意とするところです。研究開発から製造、アフターケアまでを一貫体制で行い、開発メンバーはお客様の現場に足を運び、使用環境や要望を聞き取り、それに沿った製品を提供しています。

パレットトラックにしても、成熟した商品に見えますが、さまざまなアイデアが盛り込まれ、ユーザー目線での工夫が凝らされたものになっています。

例えば、操作ハンドル部を従来の鉄製から強化樹脂に変えることで、オペレーターが操作ハンドルを握った時の手触り・握りやすさを向上させ、冬場でも冷たさを感じないものになりました。ハンドルの形状もユニバーサルデザインを設計コンセプトに一新し、リフト時の力を軽減させ、微妙な角度をつけて誰もが扱える自在なハンドリングを実現しました。また、アルミ芯のステアリングホイールでデザイン性の向上も図りました。

こうした操作性デザイン性の工夫が功を奏し、2007年度グッドデザイン賞を受賞しました。

機能面でも自動積載チェックバルブやバルブクリーニング装置、新機構として急降下防止バルブを搭載するなど、メンテナンス性、安全性、耐久性にも強化。環境への配慮として、無鉛塗装仕上げ。細部に有害物質を排除し欧州RoHS指令、ELV指令にも対応しました。

その後も改良を重ね、現在では、運搬時の負担軽減や急発進、誤発進による事故のリスクを回避することを目的とした電動アシストユニット付パレットトラック、環境に優しいカーボンレスの走行モーターを採用した自走式パレットトラックなども開発・販売しています。

パレットトラックの他にも荷物の昇降や運搬に用いるサントカー、パワーリフター等、同社の商品は誰にでも使いやすく地球にもやさしい製品としてさらなる進化を続けています。また、半導体製造工場のクリーンルームといった特殊な使用環境に適したカスタマイズも行っています。



簡単に扱え、狭い現場でも小回りの利く運搬機器が、をくだ屋技研の得意とするところ



社員とともに事業の成長を目指す

をくだ屋技研では、商品の魅力追求と同時に、社員の働く環境やモチベーションの向上に注力しています。多様な人材がいきいきと働ける職場づくりを目指して、海外からの研修生受け入れなどグローバルな人材交流の促進、プロジェクトメンバーへの女性社員起用、65歳の定年後も70歳まで働ける仕組みづくりなどを行っています。まさにボーダレス、ジェンダーレス、エイジフリーな環境の構築に取り組んでいます。2020年には、商品の展示スペースを大胆に改装し、ショールームカフェ「OKUDAYA BASE」を開業。打ち合わせや社員の憩いの場として活用されています。この改装も社員によるプロジェクトチームが主体的に企画し実現したものです。



社員の想いが込められた OKUDAYA BASE

2025年大阪・関西万博では、会場内の円滑な運搬業務に貢献すべく、パレットトラックを提供します。未来社会の実験場で「モノを動かす困りごと」の解決に向けて新たな挑戦が始まります。



OKUDAYA GIKEN

<会社概要>

本社所在地 大阪府堺市美原区丹上 263
事業内容 荷役運搬機械および環境機器の製造販売
創業 1934(昭和9)年11月
資本金 9,650万円
従業員数 124名

同社ホームページにリンクします▶

